

紹介

加藤政洋

『大阪』

——都市の記憶を掘り起こす——

「地理学者と、街へ！」

本書の帯には、このようなフレーズが掲げられている。その文言の通り、本書は現地を歩く感覚を重視した内容となっている。小説家や詩人の語りが多く引用され、彼らの足取りを辿るようにして話が展開していく。まず、本書の内容について章ごとに概説する。

序章「路地と横丁の都市空間」は、「大阪的なるもの」を表象する空間形態として「路地」と「横丁」が取り上げられる。これらは、単なる通路ではなく、それを取り囲む空間も含めたある種の小世界である。淫靡で猥雑なこれらの空間は、ノスタルジックなまなざしの下に商品化され、各所の商業施設や地下街に嵌め込まれていった。

第1章「大阪《南／北》考」では、キタとミナミの二大繁華街が比較される。どこ

か「東京の匂い」がする梅田に対し、難波は純然たる「大阪の顔」と捉えられていた。筆者は、それぞれを礼賛した文人の語りを挙げつつ、これを「明日を夢見る《北》、懐古する《南》」と整理する。

第2章「ラビリンスの地下街」は、梅田と難波の地下街を対象とする。戦後、浮浪者や戦災孤児が集まり、闇市が輻輳する空間となっていた地下道は、その後の開発によって、それらの「異物」を排除し、明瞭に役割が定められた商業空間へと変化した。

第3章「商都のトポロジー」は、同業者街をテーマとした章である。葉の道修町、繊維の井池など、近世から戦後に至る船場の問屋町の系譜は、そのまま商都大阪の歩みと重なる。また、郊外移転した西横堀の銘木問屋や、若者の街へと転換した堀江の家具街など、現代的展開についても触れられている。

第4章「葦の地方へ」は、葦が生い茂る湿地帯から一転して、工業都市大阪を牽引する工場地帯となった湾岸地域が舞台となる。そこには、工場労働者のための低廉な住宅や小売店、花街など、石川栄耀が「場末」と呼んだ一帯に相当するような空間が

生まれた。

第5章「ミナミの深層空間——見えない系をたどる——」は、ミナミの都市周縁が語られる。千日墓は阿倍野墓地へ、難波新地は飛田遊廓へ、日本橋の木質宿は釜ヶ崎のドヤ街へと、近世大坂に存在した墓地・遊廓・木質宿は、近代以降、郊外へと移転していった。これらは、衛生や道徳にまつわる言説を元にした、空間的排除の帰結である。

第6章「大阪1990——未来都市の30年——」は、平成以降の大阪市の都市計画について、その理想と失敗が描かれている。大阪市による開発計画は、周囲の空間から切り離され、歴史・地理的文脈を無視した故に失敗したと筆者は分析している。

終章「界隈の解体」では、阿倍野の再開発について述べられている。阿倍野区と西成区の境界に存在した旭町商店街は、釜ヶ崎／阿倍野界隈を特徴づける歓楽空間だった。しかし、阿倍野再開発事業によって、その界限性は解体され、高層ビルとショッピングモールによる没場所的な空間が作り出された。

以上が本書のあらましである。近代以降

の大阪全般が広く扱われているが、全体としては、都市空間を形成する力学、とりわけ「空間的排除」と「場所の均質化」が本書の主題と言えよう。

あとがきによれば、学部時代に巡検で大阪を訪れたことが、筆者の二〇年以上に渡る大阪研究のきっかけだったという。場所との出会いは、それほど強烈な感覚を引き起こす。本書も、机上で読むだけではなく、実際に大阪の街へ繰り出してその内容を追体験すべき本であろう。雑踏の音、ネオンの光、食べ物の匂い…、それらに身を晒してこそ、本書を読了することができるのではないかと思う。いざ、地理学者と、街へ！

（新書版 二五三頁 二〇一九年四月

筑摩書房 八二〇円）

（重永瞬 京都在学文学部）